

苦行僧 都田菊郎

今回は、一貫して、数値予報（延長予報）の分野の先頭に立って活躍されてきた都田菊郎さんに話を聞きました。

問：何年に卒業されましたか？

—1953年に東大理学部地球物理学科を卒業しました。

問：どうして気象学を選んだのですか？

—学生時代の始めのころは、特に、気象学を考えていたわけではなかった。夏休みに、气象台（高橋浩一郎さんのところ）へアルバイトにいらっていて、そこで、すすめられた。関口君も、その時、一緒でした。

問：学生時代は、どうでしたか？

—学生時代は、良く勉強した方だと思います。同時に、良く遊びました。例えば、映画を一週間に10本も観たりしていました。同級生には、関口、相原（気象庁）、茂木、佐藤、小口（東大）、大野（中央電力）などがいました。学生時代に同棲していたので、皆よく家にやって来たものです。

問：学生の教育についてどう考えていますか？

—東大の地球物理学科のように、他の分野（海洋や地震など）と一緒に教育することが良いと思います。なぜかと云えば、気象現象を地球物理という立場で把握するようになるからです。どうしても、数値予報などをしていくと技術的になりがちですが、地球物理学的視点を持っていると、物理的現象に引き戻されるからです。特に、昔のように、小人数でみっちりやるのが良かったと思います。

問：今までの仕事の中で最も愛着のあるものは何ですか？

—延長予報、長期予報に関連した仕事です。

問：今、どんな事に興味をもっていますか？

—やはり、季節予報の問題と、その predictability の

問題だと思います。一カ月予報の問題は、我々の仕事で、「一応可能である」という結論に達したと思っています。

そもそも、気象学というのは応用が前提になっていると思います。実際、応用があった方が、気象学の発展にも良いことが多いと思います。おおよそ、応用65%、あそび35%程度が、良いのではないかと思います。GFDLでも、自分のところは staff が65%をやり、若い人達、殊に学生に35%の部分をやってもらおうようにしています。

問：日本についてどう思っていますか？

—人材が豊富である。計算機や、人工衛星、船による観測など、日本の可能性は高いと思います。もし、日本が決意して気象学に取り組むならば、かなりのところまでゆくだろうと思います。現在は、未だ充分ではないと思います。

問：今後、気象学においてどんな事をやっていったら良いと思いますか？

—どんな分野でも、学問的には、のびてゆく可能性があります。なかでも、メソスケールの気象学と、大気-海洋相互作用の問題は重要だと思います。

問：若い人達に云っておきたい事は？

—人によって意見は異なるでしょうが、私は、気象及び海洋の将来は明るいと思います。各人は、夢を持って進むべきだと思います。才能のある人は、自分の才能を充分生かす様に、独自の発想で研究を進めると良いと思います。人のやっている事を考えても良いが、本来は、独自のことを強く押し進めるべきでしょう。日本は、体制から云って、そのようなことが出来ると思います。

多くの人が疑問視していた時代に、敢えて、一カ月予報の課題に取り組み、一人奪闘されていた都田さんは、数多くの現業センターが、一カ月予報の現業化に取り組み始めた今、季節予報の可能性をめざして、大気-海洋結合モデルを走らせている。朝早くから、食卓で、黙々と思いをめぐらしている、その姿は、敢えて自らに困難を課し、前進してゆくバネとする気運に満ちたものであった。（住 明正）